

どこにも負けない おいしいカキを育てたい

鏡町漁業協同組合 カキ生産部会長

三枝 勝男さん（鏡町）



12月19日、今シーズンの鏡オイスターハウスがオープンした。10時の開店前からお客さんが並び、昼時になると満席になるほどの大盛況ぶり。その様子を少し離れて嬉しそうに眺めるのは三枝勝男さん。鏡町漁業協同組合（以下、鏡漁協）のカキ生産部会長だ。

三枝さんは、地元鏡町の漁師の家で生まれ育ち、両親が漁をする姿を見ながら育った。小さい頃は家の前でよく釣りをしていたという三枝さんだが、「自分が漁師になるとは思っていなかった」と笑う。高校卒業後、両親とともに働き始め、漁師の仕事の面白さを知った。

平成26年1月に開業した鏡オイスターハウス。その始まりは長引く不漁だった。「あさりも魚も獲れない時期が数年続き、とにかく辛かった」と三枝さん。豪雨水害と夏の日照りであさがり死滅し、ノリ養殖の生産も落ち込む中、何か安定して獲れるものはないかと模索。鏡漁協組合員36人でカキ生産部会を立ち上げた。かき小屋開業から2年前のことだ。

まずは、カキ養殖をしている長崎県や福岡県に研修に出向き、養殖イカダの組み方やタネの付け方などを学んだ。試験



▲カキ生産部会員が丹精込めて育てた鏡オイスター

養殖で初めて養殖したカキは、まずまずの出来だった。「カキ養殖でいこう」。部会の意見がまとまり、部会員で自己資金を出し合っってイカダを増やし、かき小屋の開業を目指した。

本格始動の1年目は身入りやカキの数などうまくいかなかったが、研修先に相談したり、部会員で情報交換するなどして、始動2年目に納得のいく状況で開業を迎えることができた。店には2、3時間の待ちが出る程多くの方が訪れ、「濃厚でおいしい」というお客さんの言葉で、これまでの苦労が救われた。「八代海湾奥部はエサとなる植物性プランクトンが豊富で、それを食べて成長した鏡オイスターの味はどこにも負けません」と力を込める。

軌道に乗り始めた今シーズンだったが、昨年大型台風15号の被害を受け、壊滅的な状況に陥った。カキ養殖からの撤退の話も上がる中、流されずに残ったイカダのカキが予想以上によく育ち、なんとかオープンすることができた。「やはり漁は予測がつかず、難しいです」と苦悩を語る。

かきの養殖は、生存率をどれだけ上げるかが鍵を握る。部会では、シーズン毎にパターンを変えながら、高い生存率となる環境を調査・研究しているという。県外のカキ養殖の先輩から「養殖の仕方を教えるからおいで」と声をかけられた三枝さん。「来年あたり行ってみようと思います」と意気込む。

三枝さんたちカキ生産部会の、おいしいカキ作りはこれからも続いていく。



2016.FEBRUARY

No.134

- 3 特集 継ぐ
- 8 市民税・県民税の申告相談
- 10 国民年金保険料の納め方
- 11 暮らしの情報
- 14 市民カレンダー
- 16 暮らしの情報
- 23 広告
- 24 まちのわだい
- 27 八代で婚活・伝言板
- 28 市立博物館 冬季特別展覧会
八代焼の茶道具と花入

今月の表紙



1月10日、厚生会館で「八代市成人式」が行われました。華やかな振り袖やスーツ姿の新成人約800人が出席し、大人への門出を祝い

ました。会場では級友との再会を喜び、写真に収める姿が多く見られました。